

巻頭言

ウェスレー・メソジスト学会の原点と多様な展開

重富 勝己

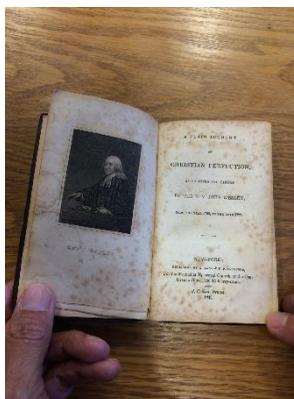
I. 2015年の冬、わたしは6名の大阪キリスト教短期大学の学生を交換交流のため引率して姉妹校である Roberts Wesleyan College を4年ぶり、3度目の訪問をしました。その際、現地の友人の車でそこから2時間ほど離れた場所に位置するフリーメソジストの最初の教会とされる Albion 教会へと案内される機会を得ました。そこは B・T・ロバーツ(Benjamin Titus Roberts, 1823~1893)がわたしたちの群れであるフリーメソジスト(Free Methodist)を誕生させる直前まで妻エレン(Ellen Stowe Roberts, 1825~1908)と



ともに貴重な2年間を牧会して過ごした教会です。通りを隔てた向かい側には合同メソジスト教会が今も建っています。案内してくれた友人によると、この教会の最初の礼拝には前の通りが馬車で埋め尽くされたという記録が残っているとのこと。

教会の内部は現代風に改装されていましたが、建物そのものは当時のままのことでした。Albion 教会の主任牧師はわたしたち訪問者を温かくもてなしてくれました。彼は書架から B・T・ロバーツ自身が愛読していたとされるすっ

かり古びてしまったジョン・ウェスレーの著書 "Christian Perfection" を取り出して見せてくれました。触ると装幀が壊れてしまうのではと恐る恐るその小さな著書を手に取ってページを繰ってみました。ところどころに線が引いてあったように記憶しています。



さてそのあとのことです。その主任牧師は私たちをなぜか足もとの悪い梯子を登らせて屋根裏部屋へと案内してくれたのです。そこは懐中電灯で照らさないと良く分からない薄暗い場所でしたが、彼は柱や梁を指さして「ほら、見てごらん。ここは当時のままで、まだ木の香りが残っているだろう？」と言うのです。わたしはさほど鋭いとは言えない嗅覚を駆使して、これが150年前の香りなのかと、やや感慨にひたりました。否、香りそのものというよりもここがその場所なのか。ここが「原点」なのかという感慨と言い換えたほうが正確でしょう。教会をあとにして外の通りに出てみると、そこは当然のごとく馬車が行き交うわけもなく、モーターリゼーションの世界が広がっているタイムギャップに当惑したのです。

II. 米国のメソジスト監督教会の教職長老であったB・T・ロバーツは、1857年に「メソジストの新派」という論文を発表し、ジョン・ウェスレー以来の伝統的なメソジスト(旧派)の流れに対して、時流に合った当世風メソジストを「新派(New School)」と呼び、その合理的・自由主義的思想にもとづく信仰のありかたを批判しました。これはB・T・ロバーツがメソジストの教えとその実践の精神についてウェスレーの原点に戻ることを訴えたと考えられます。その後のB・T・ロバーツの人生はまことに波瀾に富んだものでした。

以下、わたしの属する教団の文章から引用することをご容赦ください。

「しかし、ロバーツは彼の属していた年会では少数派であったため、たちどころに訴状が上程され、多数決の結果、監督による譴責処分が下された。ロバーツとその支持者は、3年後に予定された総会に上告をしたが、その

間教職のような信徒のような不確定な身分でペキンという町の教会に遣わされた。この教会で、のちのフリーメソジストの代表的な信徒役員となるチェスブロー一家と出会い、生涯の交わりを結ぶこととなる (Roberts Wesleyan College の前身は彼の全私財によるもの)。しかし除名処分そのものは、総会議員の中にあつた秘密結社(今で言えば、派閥グループ)の工作によって、総会で確定してしまった。

ところがこの3年間に神様は、年会での処分が不当であることを感じた信徒たちの組織を立ち上げて下さった。ロバーツらの聖書的きよめを求める信仰や、その牧会姿勢に多くの共鳴者が与えられた結果でした。そして、除名処分後の1860年8月23日、ニューヨーク州ナイアガラ郡ペキン郊外のりんご園(キャンプ場)で、新しい教会をつくるために集まった60人(一説では80人、うち教職15人)はロバーツを監督に選出した。こうして、フリーメソジスト教会は誕生した。また各地で監督教会より独立したり、バンドを結成していたグループも参集し、2年後にフリーメソジスト総会が発足しました。ロバーツは生涯、全力をかけてフリーメソジスト教会に奉仕しました。]

海外宣教という視点から見ると、米国フリーメソジスト外国伝道局は1880年初期にインド、南アフリカ、ドミニカへ宣教師を派遣します。日本への宣教開始は1896年にグリーンビル大学出身の柿原正次師が派遣され、引き続いて河邊貞吉師(本学院の創立者)が加わり淡路島を原点として伝道のわがが継承されることで、わたしの属する教団、教会や学校が形成されていきます。

III. 「申し訳ないのですが遠藤周作は、吉満義彦を尊敬することにおいては人後におちない一方で、このくらい吉満の思想を取り違えた人というのもない。ほんとうに奇妙な、しかし、考えさせられる現象です。誤認のうえに継承が成就しているのです。」(『キリスト教講義』若松英輔+山本芳久対談、文藝春秋社、2018年。31頁)

ふと目にとまった上記の文章ですが、あの遠藤周作が(でさえ? だからこそ?)

と苦笑を誘います。わたしはこの文章の当否を語る識見を持っていない前提で言いますが、種々なことを考えさせてくれる文章であることは確かだと思います。特に最後の一文に注目「誤認のうえに継承が成就している」。これは宗教者であれ、学的な営為をする者であれ、常に自戒していなければならないことではないでしょうか。

日本ウェスレーメソジスト学会学会誌『ウェスレーメソジスト研究』第19号の巻頭言を書くように求められ、冒頭で全く私的で些細な体験を紹介することから始めました。そして適切ではないと覚えつつ自派の歴史にも若干、言及いたしました。そこで強調したいのは申すまでもなく「原点」に立ちかえるということの大切さでしょうか。

「原点」に立ちかえる。そのような経験を人は生涯の間に何度繰り返すことがあるのでしょうか。あるいは繰り返すべきなのでしょう。ルターの宗教改革の出発点が「原典へ(Ad Fontes)=聖書」であることはいうまでもありません。私たちはその原典を前提にした上で、さらにわたしたちプロテスタントはどの群れに属していたとしても、立ち返るべき原点がありそこに辿り着くことができるはずですし、たえずそこに立ち返って行かねばならないとも言えます。どれだけそれを大切にしているのかということですが、その原点を誤認していたとするならば何と言う悲劇でしょうか。先ほどの若松・山本対談は次のような味わうべき文章で締めくくられています。

「ですから私たちが、ある地点まで立ち戻って、からまった糸をほどいてみないといけない。そうでないと、その先には行けないという気がします。」

(前掲、同頁)

IV. つい先日の教団総会で、わたしの群れに久しぶりに女性教職が加えられ喜んでいました。わたしの直接の学生ではないのですが、彼女が所属する神学校の卒業論文について、彼女に求められて指導する機会を得ました。彼女は女性であるというまさにその視点から「フリーメソジスト教会における女性教職」についてという論文をB・T・ロバーツの女性教職への期待と熱意を原点(原典)からひもといて完成させました。B・T・ロバーツ夫人のエレンは夫を良く助

け、卓越した牧会者と呼んでも良いほどなのですが、彼はこの夫人の影響を深く受けていたのでしょうか。早くから女性教職の役割を高く評価し、女性教職が活躍することを渴望する文章を遺しているのです。フェミニズム神学や女性史からは当然といえばそうなのでしょうが、男性であるわたしには、見過ごしてしまいがちな視点を発見させてくれて喜んでおります。

言い訳がましくなりますが、最近是用務多忙の故に学会への出席もままならなくなっているような次第で、巻頭言を書くなどおこがましい限りだと自覚しています。しかしその伝統の末端に身を置く者として、『ウェスレーメソジスト研究』の今号が「讚美歌・再考」というテーマで昨年の学会発表を継承したものと想像するのですが、タイトルからは意欲的な研究を思わせるものが多様に展開されていると楽しみに発刊を待つばかりです。

さて来年は学会発足20周年ということで、学会が関西で催されると仄聞しますが、今後のますますの発展を祈りつつ拙文、駄文を擲筆します。

(阪南キリスト教会牧師／大阪キリスト教学院院長)